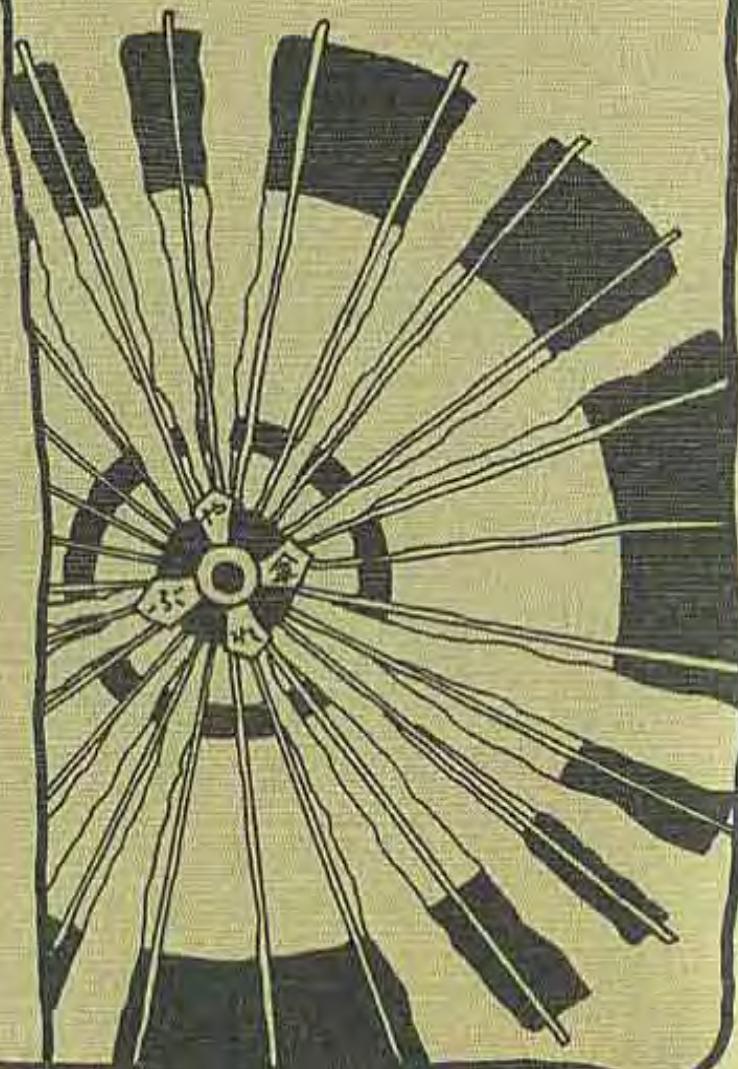


やぶれ傘



九十一号  
一九〇六年十月

数珠玉に出水の泥の乾きゐる  
歯身放れ二百十日の日玉焼き  
野分後の砂利の振りを踏みにけり  
五位鸞の声が無月の空をゆく  
戦中の話や雲の峰遙く  
午後の風立つて等木揺らしけり  
やはらかき雨も三日や經印  
穂への鉄梯子降り月見草  
初秋の川原の空のちぎれ雲  
この畑の向かテは田んぼ草雲電  
秋の夜に指輪の石の転げ落つ  
ははききの影にかくれて子等のかけ  
夕風のすすき夕日のすすき道  
雷鳴の中オカリナの音の流れ  
里は夏飛込み岩の今もなほ  
藤井美晴  
廣瀬裕男  
丑久保 駿  
青谷小枝  
鶴見清望  
白石正利  
渡邊幸彦  
朝比奈洋子  
安藤久美子  
大島英昭  
きくらきみえ  
田中雅也  
坂本昌行  
佐々木和也  
山本和也  
高橋信行

や わ れ 拿 句 集 抄  
大 崎 紀 夫 選

数珠玉や流れは瀬を越えて落ち  
もたもたと蜘蛛の走る真つ晝間 有賀昌子  
公園の弦も片陰懶れざる 松村光典  
椿木の三本ほどを壇とし 桜本正生  
葉の陰に西馬の鱗の見えてをり 村田一式  
冷房をかけて聲をころこるす 伊藤更正  
木犀の香のある駅に列車待つ 小池一功  
待ちの皮の長椅子冷ややかに 大野芳久  
幕間のロビーにぎやか秋始 岩田祖子  
しやきしやきと振振かる音狂寝ざめ 黒木東兵  
白鈴花に触れて路地へと曲がりけり 小巻若槻  
ギヤロップして夏野へ入る仔牛かな 時田義典  
夏蟬や水かけろふの弁財天 貫井園子  
雲海に浮かぶ孤島や浦嶋高 野口希代志  
ヘリコプター一百十日を低く飛び 横木美代

硫 気 孔

大 崎 紀 夫

炎 昼 と な り むる 交 叉 点 の 先  
ひまはりを 見てゐていつか雲を見て  
岩 鏡 すこしはなれて 硫 気 孔  
鯨を焼く空のうつすら曇る日は  
扇 風 機 まはしてガード下酒場

葡萄食ふ隣りの屋根のうへに空  
ぽんぽんと威し銃ぽんぽんとまた  
手と鎌のふたつがのびて数珠玉刈る  
コスモスの真上で電話線工事  
格納庫前に小型機秋の雲  
台風がくる日ねぢりんぼう齧り  
銀杏のにほひかなりの近さより

根橋宏次

竿 数 大 雨 湖 秋 散 獅  
 ふ 珠 川 す の の の の  
 れ ば 玉 に 秋 し 墓 ほ くら 舟 に 子 独 活 の 花 の  
 と ほ く に 出 の 水 母 に 狐 ひとしきりたう もろこし まはり に  
 く に 音 の 泥 の 乾 刀 うもろこし なが が捨てらるる 活の花の  
 が 秋 き ふ る の 二 三 うもろこし 手折る音 まはり に  
 の 海 き ふ る つ つ に に に に  
 散髪に眼鏡をはづす敗戦日  
 獅子独活の花のまはりに天氣雨

二百十日

きくちきみえ

明け方の雨戸繰る音梅雨寒し  
燕の子中の一羽が下を向き  
道よぎる四万六千日の猫  
ひまはりの腰の辺りで開きさう  
太陽の渦まいてゐる夏の川  
地の蟬の掃かれて風の軽さかな  
学校の理科室にゐるウシガヘル  
打ち水に何かが混ざる鮮魚店  
秋蟬のこゑのあはひに入りにけり  
黄身流れ二百十日の目玉焼き

秋の蟬

大島英昭

蓮の花見て界隈をぶらぶらす  
富士山がうすうす見ゆる竹煮草  
月見草無蓋車両がとほりけり  
リサイクルショッピングにいにい蟬のこゑ  
早稲の穂が出て午後の日はやはらかく  
竹藪の向かひに倉庫秋の蟬  
橋渡り臭木の花を右に折れ  
野分後の砂利の湿りを踏みにけり  
残暑やはらぐ農協は十時より  
ヒメムカシヨモギの影を道に踏み

草もみぢ

人が来る白さるすべり散る下を  
居酒屋の入り口蟬が死んでゐる  
水迅し石におはぐろとんぼゐて  
郵便のバイクが南瓜畑来る  
嵐来る報聞きをればつくつくし  
五位鶯の声が無月の空をゆく  
大過ぎたる朝の林檎の香く  
秋の過ぎたる朝の林檎の香く  
高雲が映つて青い水たまり  
木の実をひとつ捨ひけり  
草もみぢの跡にまだ基礎石

藤井美晴

ばんがさ集

茨三秋づ紫街水鰐戦  
の実層高か苑川底口中の雲峰  
雨後し合づ咲向うの音話や  
の水守宿か文字岸聞こえ  
嵩閣と取壊より走る雲の峰遠く  
増す天の行壊されつぐつぐの日紅  
す初等の行く草の家受けにけり  
岸辺紅葉手走る花跡りし川廣瀬雅男

丑久保勲

簾木

午後の風立つて簾木揺らしけり  
ダンプカー静かに止まる炎暑かな  
動き出す貨物列車へ大西日  
かりかりのバゲットちぎる朝曇り  
ビアホールの団扇を使ふ交差点  
抜きにくき昔の画鋗夜の秋  
かなかなのこゑ焼き肉の食卓に  
急須より最後の滴水やうかん  
半開きの庫裏のガラス戸酔芙蓉

幕間の装

ひはもう秋モ

ード

青谷小枝

鉢

叩

砂灼くる島へ星見に魚食べに  
捌くとき鰆美しき瞳をもてり  
新涼の目を閉ぢて弾くバンドネオン  
空はもう秋大寺の大甍  
のびはうだいの草に花ある秋の寺  
底紅のしづかなりけり午後の寺  
ジーランズを叩き洗ひに鰯雲  
秋天へ枝剪り鋏伸ばしきる  
二階建てバスの二階の秋の空  
やらかき雨も三日や鉢叩

月見草

瀬島酒望

磧農蹲千ぼ雨竹土凌霄花油照り廓  
へ機の水う粒垣用明け老舗の画廊ありし家の壁  
の具陽ぬらの光る草空閑ぢにけり  
鉄梯試網にゐて舟石むら蟬ドラム缶  
子乗炎止まりて赤溜り鉢女坂  
降会が底て赤蜻り水叩坂  
り月秋紅に蛉水  
見草暑しに

ちぎれ雲

白石正躬

明けやすの川にはつかな風ありて  
かなかなの風のごとくに來たりけり  
仏壇の香のただよふ今朝の秋  
初秋の川原の空のちぎれ雲  
川風や丈ののびたる猫じやらし  
土手に立つ野は秋晴の広さかな  
歩く先はたはた一つ飛び出しだ  
魚跳ねてすぐ音消えし秋の暮  
木の下へ猫の消えゆく秋の暮  
ポケツトの柿の円みと重みかな  
かなかの風のごとくに來たりけり  
かなかなの風のごとくに來たりけり  
仏壇の香のただよふ今朝の秋  
初秋の川原の空のちぎれ雲  
川風や丈ののびたる猫じやらし  
土手に立つ野は秋晴の広さかな  
歩く先はたはた一つ飛び出しだ  
魚跳ねてすぐ音消えし秋の暮  
木の下へ猫の消えゆく秋の暮  
ポケツトの柿の円みと重みかな

草雲雀

渡邊孝彦

青柿やホースの届く手水鉢  
軽トラの祭囃子が後につき  
小流れの上に巣を張る秋の蜘蛛  
蜩のひとこゑくぬぎ林より  
この畑の向かうは田んぼ草雲雀  
足もとに用水の音稻の秋  
草叢に見つけ南蛮煙管かな  
集待宵の町へ小走りパンを買ふ  
こほろぎは郵便箱に隠れゐる  
秋刀魚焼く煙にぱつぱつ降り始む